

遺風があつたならば無論改善して善き遺風を保存し、その善き遺風より新らしきものを開發して行くといふ様な事は、もう論ぜずして明かなる事でありませう。それ故に今の思想界に於て唯だ古きに據るからといつて、日本書記の元に戻らんければならぬといつて、その後發達した日本の文明を排斥せんとするが如き固陋なる態度、又新しきに行くからといつて歐米の思想界に起つた急激なる一端の思想を採るが如きは、是は無論間違ひである。飽までも我が歴史的傳統的の思想を整頓して、その中から開發して行かなければならぬのであります。

七六

九、自主批判律

モウ一つは自主批判律であつて、外來の文明に對して一概に之を斥けるのは無論いけぬ、又輕々しく之に溺れるのもしけぬ。それ故に「善さを採り惡しきを捨て、」と仰せられた御趣意に基き、又「智識ヲ世界ニ求メテ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と仰せ

られた聖旨に基いて、我が日本の文化を基礎にして西洋の長短を觀て、嚴密なる批判を與へ、さうしてその取捨を誤らぬやうにして行かなければならぬ。この自主的批判を完うしやうとするには、我が在來の文明の全部を明かにしなければいけません。唯だ惟神の教が有難いからといつて、貧弱な意味に考へて居る時には、そこに如何なる哲學があり、如何なる宗教があり、如何なる人生觀があり、如何なる倫理の根柢があり、この紛糾錯雜せる思想問題を解決するに幾何の力ありやといふことになつて參りますと、そこに色々の不足を感じて來るのである、本へ戻るが宜いからといつても、さういふ事では間に合はない。西洋思想といつても、それは悪い所もありませんけれども、西洋にも哲學もあり、道徳もあり、宗教もあり、様々な文化もあり、申々彼等は熱心に研究したる思想があるのでありますから、これを自主的に批判せんとするには、自主的思想といふものを餘程能く高め、餘程能く明かにして掛からなければならぬ。自から奉ずる所のものを貧弱にし、淺薄にして置いて外來の思想に對つたな

七七